

# The Kagawa Museum NEWS

Vol. **42**

香川県立ミュージアム  
ニュース  
2018 秋



## CONTENTS

特集 目からうろこのミュージアム! PartII いつもの暮らし これ、いいね。

トピック コレクションについて

ミュージアムガイダンス 生誕120年 鎌倉芳太郎

歴史民だより 崇徳院神霊、京都へかえる

展示室だより 高松藩の明治維新／20世紀の美術II

かたえだんぞめさんすいもんじょうふながぎ  
鎌倉芳太郎「型絵段染山水文上布長着」

山は水を讀え、川となって下流に注ぎこみ、豊かな森を育む。鳥瞰的に眺める山は幾重にも連なることで、奥深い豊かな自然の情景として捉えています。沖縄特有の亜熱帯地方の気候は鮮やかな色彩の配列、濃淡による染め付けの妙技から醸し出されるのです。沖縄に生まれた紅型染は、山水画の様式に基づきながら、風土を色濃く反映した意匠に特徴があり、インド、東南アジア、中国等との交流が盛んであった琉球王朝時代の異国趣味を彷彿とさせるものです。

パネル展「生誕120年 鎌倉芳太郎の業績」(10月2日～12月24日)で紹介いたします。



# 目からうろこのミュージアム!

## PartII いつもの暮らし これ、いいね。

私たちの生活の中で欠かせない衣・食・住。本展は、人の営みの三原則ともいえるこれらのキーワードに焦点を当て、私たちは、いかに暮らしのなかの潤いや心の安らぎを求めてきたかについて検証しようとするものです。展示は四つのカテゴリに分けて、まずは、私たちの生活空間を客観的な視点で見つめ直すために、時代や地域性を越えて異空間化された設えしつらのなかで生活に欠かせない様々なモノが、どのように私たちの目に映るのかを体験的に味わってまいります。そして季節ごとの行事や催しを通して人とモノが関わる特徴的な時代性ひもとの実態を紐解きます。

“もてなす”というある意味で習慣化された行為は、相手に何かを積極的に伝える個人的な事情によって催されるもので、拘束力がない“緩い”儀式であり、観て、味わい、楽しむことを前提に特別に設えられた場面で美的な感性を共有しようとするものです。心の潤いという意識の在り様によって、モノは華やかさを発揮し、装飾的に私たちの生活を彩ります。また、懐かしさに触れた時の憧れに近い心の高まりは、さまざまな感情を呼び覚ますことになるでしょう。こうした場面を創造するのは、現代のクリエイターたちなのです。このような卓越した現代の職人によって、歴史的な意匠はんすうは反芻され、時代性を取り込むデザインへと還元されていくのです。

この展覧会では、モノの見かたたいじや対峙の仕方について鑑賞者自身に提案し、誘発することを目指します。展示されるモノは、日常のごくありふれたものであり、展覧会場の非日常的な設えによってモノたちの本来の意味は網膜上から一度乖離かいりし、現実から切り離されることで、より根源的なモノの実態あらを露わにします。展示室では、この少し不思議な視覚的体験を通してモノが持つ普遍性と対峙することとなり、私たち観る者は自らの持つ潜在的な感性の芽を育むことになるでしょう。今回の展示では、民俗資料を中心に据えて、日常と非日常のはざまにある美的感情の介在する職人技や製作者の存在を意識し、意匠や装飾性と地域社会という観点から捉える展示空間をご覧ください。

### 第1章 いつも日和 わたしのお気に入り時間 くらしのヒント

この章は、今回の展示の導入部分として、“くらし”をテーマに架空の生活空間を再現し、私たちの暮らしそのものを客観的に見つめ直そうとするものです。章解説は、できるだけやさしく緩い詩文調で親しみやすいことばを展示空間に重ね合わせ、ふだん気付くことのない“くらし”の臨場感に理想的な生活スタイルを夢想してみても、という問いかけに始まります。戦後まもない頃の、私たちの知らない近い過去は、少し異空間でありながら、身近なこととして体験的に振り返ることができます。

### 第2章 身だしなみ百貨 オシャレ和服のルーツ

この章では、昭和の暮らしぶりを振り返り、そのお洒落度を今の私たちと比較してみることを提案します。お洒落の原点であるさまざまな和服の意匠デザインに着目し、和の生活スタイル



県立体育館椅子 剣持勇  
当館蔵

ルと結び付けます。染織の技術を駆使した華麗なわざと美への執着に、心躍る豊かなくらしへの憧れと導きを感じられます。現代の技術革新によって理想的な表現を手に入れることができました。しかし、これにより手わざによる感覚的なテクスチュアは必要とされなくなってしまいました。このままではモノづくりの精神を見失うことになりかねません。ここでは、モノづくりの時代を振り返り、その生い立ちや目的、作り手のこだわりと享受する側の求めるものについて考察します。

### 第3章

#### うつわのある暮らし うつわと暮らす 食ともてなし おもてなし今昔

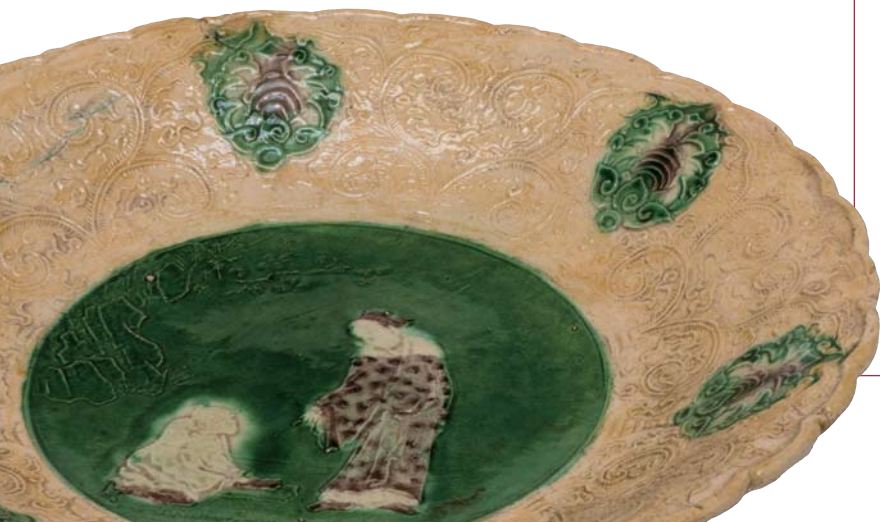
この章では、さまざまな器に注目し、人を結ぶ器の魅力を紹介します。昭和と平成、家族の在り方や暮らしぶりには多少なりとも隔たりがあります。核家族化による家族構成の分化、これによって年中行事の削減、簡素化は合理的な考えに基づく言い訳の盾にされがちです。近隣住民と触れ合う機会が薄れていく過程では、地域の慣習やイベントなどの情報交流も停滞がちではないでしょうか。食と器をくらしの原点と位置づけて、もてなしや人的交流の復活によって、私たちの暮らしは変えられると思います。なぜって、それは、食とうつわが人と人を結び分り合える唯一の方法であり、それが私たち日本人の文化そのものなのだから。

### 第4章

#### かわいい工芸品 好き! に会う日 懐かしいがほぼ新しい

この章では、暮らしに潤いと活力を与えてくれる、くらしのなかの工芸の魅力を紹介します。工芸品は用と美、つまり使えてさらに美しいと思えること、このふたつを満たしてくれるのです。実用的なモノではありますが、使うことで、愛着が湧いてき

緑釉絵付大皿 当館蔵



オルガンの椅子 当館蔵

ます。さらに長く使い作り手の遊びの心がみえると、そこから作り手と使う側とのふれあいがはじまるように思っています。それは私たちの生活のなかにふと和やかな空気がそよぐ瞬間でもあるように思えてなりません。作り手と使う側のエンドレスな対話が聞こえてくる感覚に沿うことができる展示を目指しています。

(専門学芸員 田口 慶太)

#### | 展 | 覧 | 会 | 情 | 報 |

香川県立ミュージアム10周年記念コレクション展  
目からうろこのミュージアム!  
8月4日(土)~11月25日(日)

PartII いつものくらし これ、いいね  
10月2日(火)~11月25日(日)

会 場：特別展示室

開館時間：9:00~17:00(入館は閉館の30分前まで)

※夜間開館：11月2日、23日 19:30まで

休 館 日：月曜日(ただし10月8日は開館)、10月9日(火)

観 覧 料：(全会期共通)一般800円/団体640円

(各会期)一般500円/団体400円

高校生以下、65歳以上、身体障害者手帳等をお持ちの方は無料

展覧会関連イベントはp.8 インフォメーション欄をご覧ください。

# コレクションについて

## コレクションの意義とは

国内の多くの美術館、博物館には、歴史的な時代背景を知る上で欠くことのできない資料あるいは美術作品が所蔵されており、一般に「コレクション」と呼ばれています。所蔵される資料・作品群は美術館、博物館等の調査研究機関に永年にわたって保管され、調査対象としてその詳細なデータが蓄積されています。また、その調査研究内容とその成果は、逐次、開示そして収蔵品展として展示されます。これらの資料及び美術作品は寄贈、購入、場合によっては一定の期間を定めて預かる「寄託」を行うことで、公益性のある資料としての価値づけがされるとともに、将来への歴史的資産の管理と維持の継承という役割に貢献しているのです。

コレクションは決して美術館、博物館の専門職が独占するものではなく、一般公開のほか、あらゆる研究者に対して広く開かれたものでなければなりません。そのうえで、資料管理に関しては、材質や経過年、状態把握を踏まえ、施設構造及び周辺環境に応じた独自の理念のもとにおこなわれなければなりません。つまり作品資料を所有することだけを捉えれば、コレクションとは永年にわたる管理を背負うことであり、現在の資料のコンディションを未来へと維持していくことにはかならないのです。

資料収集とは、当然のことながら歴史上の、美術作家のすべての資料や作品を所有することを目的とするものではありません。コレクションは研究対象としての価値がより高いものであるべきですが、その価値が高いか否かの基準の在り方には千差万別、様々な意見があるでしょう。例えば、既収蔵品、あるいは歴史的な事実とされる何らかの動向についてその意味や背景となる事実が裏付けられ、補完するために欠かせないものであるかどうか、といった観点が挙げられます。

## 昨今の公立美術館をとりまく状況

1980年代、日本列島は、更なる経済成長を遂げながら、後半期には一気に花開くように、好景気に沸きました。元号が昭和から平成に改まり、バブル崩壊に至るまでのあいだ、全国各地で公立美術館が続々と建設されていきました。

全国の公立美術館は高額な美術品を購入、所有することが地域文化の豊かさを示す指標となっていきました。美術鑑賞は、庶民の高尚な文化活動であり、学校教育現場との連携が謳われ、美術教育は美術館の役割の一端を担うこととなります。こうした地方行政による地域貢献を目論みながら、一方で公立美術

館の多くは欧米型の美術館に倣い、主には西洋美術における世界的に著名な作家の作品をコレクションに加えることが観光の活性化に貢献すると考えていました。実際に、観光資源としての美術館の在り方に文化行政がシフトしていったのはバブル後のことであり、人口減少による収入減を補うための観光客誘致に美術館が大いに活用されるようになったのです。

全国には、西洋美術を中心とした収集方針を掲げる美術館が氾濫し、他館と同品質の美術品をコレクションすることが蔓延していきました。他の美術館と同等レベルの品質の美術品を所持することを美術館の性格の第一義として求めたのです。地域への教育的貢献を目指すべき地方の美術館の在り方が次第に希薄になっていったことは、憂慮すべきことであり、これにより、全国のどの美術館へ行っても同じようなコレクションが常設展示室に並ぶこととなるのです。

現在では、国内外の現代美術をコレクションの軸とする公立美術館が開館(岐阜県現代陶磁美術館(02)、金沢21世紀美術館(04)、青森県立美術館(06)、アーツ前橋(13)、富山県美術館(17))するなど、地域性を強く打ち出した新世代の美術館は、これまでに培ってきた収集方針を顧み、現代のアートシーンを見据えた、将来性のあるコレクション形成について、積極的に取り組み始めています。

## 県立ミュージアムのコレクション

当館には、美術作品及び歴史・民俗資料等あわせて約300,000点が所蔵・管理されています。これらの資料のなかでも、おおむね近代以降の美術品は1,800点に及び、香川県の美術動向にまつわる遍歴を垣間みることができます。コレクションは、絵画、彫刻、工芸などの幅広いジャンルに及び、明治以降の香川を代表する作家たちを網羅的に収集しています。

近年では、将来を期待する若い作家も登場し、国内外で華々しい活動を繰り返しています。こうした若い作家は、自身が生きる時代をいかに理解、制作活動を踏まえて証言しているのか、多様な価値観が噴出する現在、社会性を孕んだ表現のあり様について自らに問い続けています。私たちもまた、作家たちの心を突き動かす表現活動に触れ、造形的な新しい試みのなかに、今の時代を見出すことができるでしょう。

(専門学芸員 田口 慶太)

## 沖縄文化と鎌倉芳太郎

徳川幕府の政権下、直接的には薩摩藩の下にあった“琉球国”つまり現在の沖縄は、中国との良好な関係を維持する政策をしていました。沖縄が異国情緒を醸しているのもそのためであり、中国をはじめ東南アジア圏の国々との交流が、沖縄独特の文化を誕生させました。明治後期には、明治政府の命により、岡倉天心による「宝物取調」が行われました。これは明治政府が琉球の特色ある芸術文化の価値“異国趣味”に関心を寄せていたことを物語っています。この異国趣味による沖縄文化の研究は、岡倉天心をはじめ当時の研究者にとって、大いに興味を示すものでした。大正10年(1921)の柳田国男らが沖縄に民俗学的な価値を見出したことで、知られざる異国趣味を色濃く反映した沖縄特有の文化が明らかにされるようになりました。中国、インド、トルコの建築をつぶさに見て歩いた建築家伊藤忠太は、この異国情緒あふれる沖縄の建築物に魅了された一人でした。

香川県三木町出身の鎌倉芳太郎は、大正10年東京美術学校選科を卒業、教員として沖縄県女子師範学校に赴任し、大正12年(1923)まで滞りました。教員としての職責を果たしながら、沖縄の資料収集と研究に努め、前述の伊藤忠太とともに「琉球芸術調査事業」に参加しました。この調査のため、芳太郎はドイツ製のカメラを購入し、首里城をはじめ多くの建造物などや美術品について膨大な枚数におよぶ撮影を行いました。この写真撮影と型紙などの資料収集、調査によって、記された成果は“鎌倉ノート”に詳細に綴られており、民俗学的な見地から庶民が生活する住居のスケッチ、沖縄特有の入れ墨の意匠など、克明な記録が遺されています。

大正14年(1925)、解体の危機にさらされた首里城は、芳太郎と忠太の連携を経て、伊藤忠太が政府機関への取り壊しの

中止を進言したことで、一旦は難を逃れることができました。しかし、のちに沖縄戦にて首里城は火災に遭い、灰塵と化してしまうこととなります。首里城の再興に際して芳太郎がかつて克明に撮影した写真が基となって、沖縄の象徴的存在である首里城が復元されました。芳太郎はこのように、沖縄文化の復興に貢献、＜琉球王国の城(グスク)及び関連遺産群＞のひとつとして首里城跡はのちに世界遺産に登録されています。

## 染織家、鎌倉芳太郎

芳太郎は、すでに失われた沖縄特有の伝統的な染色技法である“型絵染”を復興させたことでも知られています。のちに、伝統的な工芸技法の復元と継承により重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されました。芳太郎は、沖縄において、廃屋と化した型絵染の制作工房跡から型絵を収集、絵柄をいくつものパターンに整理・分類することで沖縄特有の意匠の発見に至りました。

しかしながら、芳太郎の功績は前述のとおりこれだけに止まりません。前述の沖縄文化研究者としての活動は、宗教や民俗、あるいは文学に関連する沖縄の遺産の復興に大きく寄与しています。染織家としての一面は、沖縄文化研究の一部であり、その成果が宗教や民俗、建築の解明に及んだことは特筆されるべきでしょう。

沖縄文化研究は芳太郎自身の生涯を通して求めていたものであったことは若かりし芳太郎自身の言葉からも明らかでした。「顧みれば二十代の初めに渡琉してより六十年の星霜を閲した。その間、私の生涯を賭しての研究の纏めに留意しつつも実現の運びに至らず、今日に及んで漸くにして初志を達成し得たことは、沖縄学が澎湃として興りつつあるこの時期に当り、私自身深い感慨を禁じ得ない」(『沖縄文化の遺宝』岩波書店 1982年)と述べています。

今年、鎌倉芳太郎の生誕120年にあたります。日本の文化遺産を幾度となく危機的な状況から救い、将来へと語り継がれるべきものへと導いたその功績を称えてこのパネル展は開催されるものです。

(専門学芸員 田口 慶太)



色差し(着彩)をする鎌倉芳太郎

協力:(株)講談社

展覧会情報

明治150年関連企画

パネル展「生誕120年 鎌倉芳太郎の業績」

日時:10月2日(火)~12月24日(月・祝)

場所:2階西ロビー

# す とく いん しん れい 崇徳院神霊、京都へかえる

おん りょう ちん ぶ  
—明治改元直前の怨霊鎮撫プロジェクト—

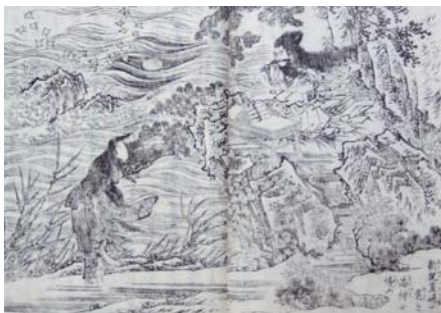


## 崇徳院の怨霊伝説

崇徳院は、平安の昔に流罪を受け、京都に戻ることが許されず失意のうちに讃岐の地で亡くなり怨霊となったとされています。慶応4年(1868)旧暦8月27日、朝廷は崇徳院が眠る坂出の白峯陵で遷遷の儀式を行い、9月6日に京都の白峯宮(現・白峯神宮)に崇徳院の神霊を遷しました。9月8日の明治改元に先立って崇徳院の念願であった京都遷遷が実現して、ようやく新しい時代のはじまりが宣言されたのです。その遷遷運動を熱心に推進したのが、泉州熊取(現・大阪府泉南郡熊取町)の郷土である、中瑞雲斎でした。



すとくてんのう ごかんこうき けんぶんきらく いち  
崇徳天皇御遷幸記見聞記録 巻  
(文久3年起・瀬戸内海歴史民俗資料館蔵)



ちんせつゆみはりづき しんいんすぐしま うらみ わたづみ うった  
椿説弓張月 新院直島に冤を海神に訴ふ。  
(曲亭馬琴作・葛飾北斎画・香川県立ミュージアム蔵)

## 中瑞雲斎と直島三宅家

国学を学んだとされる瑞雲斎は、ペリー来航以来の国の混乱を崇徳院の怨霊の仕業だとして、その怨霊を鎮めるためには崇徳院の神霊を京都に戻し、子孫を探し出して祭らせる必要があると考えました。文久3(1863)年、瑞雲斎は情報を求めて讃岐国の金毘羅さんを訪れた帰路、直島で庄屋の三宅家を偶然知ります。三宅家は崇徳院の落胤の系譜を語り伝えていたのです。

三宅家がいつ頃から崇徳院の落胤の系譜を語りはじめたのかは不明ですが、江戸時代の後期にはそうした伝承を伝え、直島諸島の塩田築立を「国家・朝廷のため」と建言したり、異国船への海岸取締役として活動したりしました。三宅家には勤皇画家として知られた佐藤正持も訪れており、尊王攘夷の思想を持っていたのかもしれませんが、また、直島と崇徳院との関わりを伝奇物語『椿説弓張月』の中で著した曲亭馬琴を江戸にたずねたりしています。

直島で玄関の門守りとして吊られるアワビの貝殻には「鎮西

八郎為朝御宿」の墨書が記されます。『椿説弓張月』の主人公源為朝が、疱瘡神を退治した話に由来するものと考えられ、ここにも直島と馬琴との関わりがうかがえます。

## 崇徳院神霊、京都へかえる

その後、瑞雲斎は京都において、公家や武家に崇徳院神霊の遷遷について建言しました。幕末の動乱の中で一進一退を繰り返したのち、ついに慶応4年4月、崇徳院神霊の京都遷遷が決定し、瑞雲斎は御用掛に任命されます。同じく建言した三宅家の取り立てや三宅家に伝わる崇徳院木像の京都遷遷は見送られますが、瑞雲斎の計らいで勅使一行は帰路、直島に立ち寄り崇徳院の尊像を拝しています。高松松平家の松平頼聡もまた、崇徳院神霊を迎えるための京都での伴を務めました。



せんみょう  
明治天皇宣命  
(慶応4年・金刀比羅宮所蔵)  
明治天皇が京都遷遷にあたり崇徳院に奉った鎮魂の宣命。

## 京都・白峯宮での祭祀

明治2年(1869)6月、三宅家の当主三宅源左衛門に神祇官より出仕の命令が来ます。その時、京都の白峯宮の神官として呼び寄せられたのは三宅氏、猪熊氏、多氏など、古からの崇徳院ゆかりの家筋のものたちでした。明治6年(1873)には、奈良時代に淡路廃帝として淡路島に流され亡くなった淳仁天皇の神霊も白峯宮に移され、三宅たちはその合祀にも関わりました。

新しい時代の到来の中、朝廷によって執拗に行われた怨霊の鎮魂。神霊を鎮撫し祭れば幸せをもたらし、粗末に扱えば災いをもたらすという日本人の神観念は、近代を迎えてもなお、国家として強く意識されていました。明治150年、そのはじまりにあたり行われた崇徳院の怨霊鎮めは、国家プロジェクトとして行われたのです。伝説が時代とともに増幅し、新たな歴史をつくったともいえるでしょう。

(瀬戸内海歴史民俗資料館長 田井静明)

展覧会情報

明治150年関連企画

テーマ展「崇徳院神霊、京都へかえる」

会期: 9月22日(土)~11月25日(日)

場所: 瀬戸内海歴史民俗資料館第9・10展示室

開館時間: 9:00~17:00 ※入館は16:30まで

休館日: 月曜日(月曜日が休日の場合は、翌日火曜日)



## 明治150年関連企画 高松藩の明治維新 —新時代を生きる侍たち—

10月2日(火)～12月24日(月・祝)

明治4年(1871)7月、廃藩置県により高松藩は廃止され、高松県が設置されました。同年11月には、高松県と丸亀県を統合して香川県(第1次)が設置されますが、その後香川県は名東県(現在の徳島県)や愛媛県に編入され、現在の香川県(第3次)が誕生したのは全国で最も遅い明治21年(1888)12月のことでした。

廃藩後、旧藩主松平頼聡は東京へ移住し、華族として新たな道を歩むことになり、旧藩士たちも家禄の廃止などによって、それまでと違う生き方を模索せざるを得なくなります。

このような激動の時代、旧高松藩の“侍”たちは、大きな変革の波にもまれながらも、香川県の分県独立や次世代を担う郷土の人材育成のために奔走するなど、懸命に新しい時代を生きようとしていました。

本展では、明治前期の高松を中心とした香川県内の動きや、その時代を生きる旧高松藩主・藩士たちの姿を紹介します。

(主任専門学芸員 野村美紀)

- ミュージアムトーク／10月20日(土)、11月24日(土)、12月8日(土) 13:30～
- 同時開催／パネル展「没後100年 香川県独立の父 中野武嘗とその生涯」



大礼服姿の松平頼寿 (高松松平家歴史資料)

## アート・コレクション 20世紀の美術Ⅱ

10月10日(水)～12月24日(月・祝)

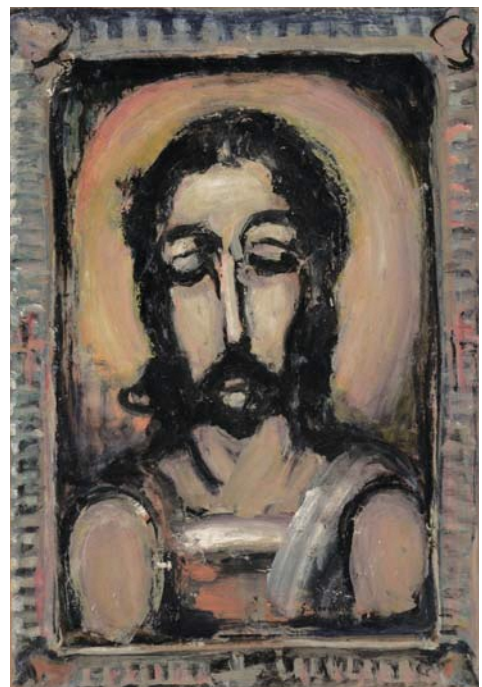
目を閉じた静かな表情、一際<sup>ひときわ</sup>明るい光輪、厚く絵具を塗り重ねたこの作品はキリストをモデルに描かれました。熱心なカトリック教徒だったジョルジュ・ルオー(1871～1958)は生涯にわたり宗教的な題材をもとに多くの作品を残しました。キリストを描いた作品が目立ってくるのは第1次世界大戦の頃(1910年代)からです。ルオーは戦争という非人道的な行為が行われている中で神を自分の心の中に見出しました。20世紀初頭はヨーロッパ美術の1つの転換期であり、キュビズムやフォービズム、ドイツの表現主義など様々な運動や主義が起りましたが、その中でルオーは試行錯誤を繰り返し自らの表現を模索していきました。

ルオーはパリに生まれ、貧しい職人の家に育ちました。14歳の時ステンドグラスの工房で修業をするかたわら、国立装飾美術学校に通い、画家への道を志し始めます。ルオーはピエロ、キリスト、娼婦、労働者などの主題をステンドグラスを思わせる黒の太い輪郭線によって描きました。ルオーが生涯にわたって描き続けたキリストはルオーの内なる神であり、ルオーはまたキリストを描くことで救われていたのかもしれませんが。

本展ではルオーをはじめ、所蔵作品の中から20世紀の美術について紹介します。

(学芸員 高嶋良子)

- ミュージアムトーク／10月13日(土)、11月10日(土) 各13:30～



ルオー「キリスト」1939年 当館蔵

(c)ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2018 G1428

明治150年関連企画

①中野武宮翁没後100年・顕彰会発足記念シンポジウム  
「ナカノ・ブエイってだれ?」【共催事業】

主催：香川県立ミュージアム、中野武宮顕彰会  
日時：10月8日(月・祝) 13:30~16:00  
場所：地下1階 講堂  
報告者等：石井裕晶(歴史研究家)ほか  
定員：230名(先着順)  
申込期間：9月8日(土)～、定員になり次第終了



中野武宮

②講演会「鎌倉芳太郎の業績」(仮)【共催事業】

日時：10月13日(土) 13:30~15:00  
場所：地下1階 講堂  
講師：波照間永吉(元沖縄県立芸術大学教授)  
定員：230名(先着順)  
申込期間：9月13日(木)～、定員になり次第終了

③講演会「近代の栗林公園について」(仮)

日時：11月11日(日) 13:30~15:00  
場所：地下1階 講堂  
講師：三宅拓也(京都工芸繊維大学助教)  
定員：230名(先着順)  
申込期間：10月11日(木)～、定員になり次第終了



栗林公園内の商工奨励館

④学芸講座「明治が出会った西洋美術」

文明開化のなかで西洋美術に触れ、大きな刺激を受けた明治の芸術家たち。彼らの作品や、当時紹介された西洋美術についてお話しします。

日時：10月21日(日) 13:30~15:00  
場所：地下1階 研修室  
講師：一柳友子(当館主任学芸員)  
定員：70名(先着順)  
申込期間：9月21日(金)～、定員になり次第終了



小林萬吾  
「晴日のあんず」

ワークショップ 特別展「目からウロコのミュージアム」関連

①「これ、いいね。小さなほうきに手作りカバー」

日時：10月7日(日) 13:00~15:00  
場所：地下1階 研修室  
講師：日下幸・日下綾希(造形作家)  
対象：小学5年生以上 ※針を使用します  
定員：30名(応募者多数の場合は抽選)  
参加料：350円  
申込期間：8月28日(火)~9月18日(火) 消印有効



写真はイメージです

②カフェトーク「くらしとモノー手仕事からはじまる、ちょっといい暮らしー」

日時：11月4日(日) 14:00~15:30  
場所：カフェ・ポット・ミュゼ(1階喫茶室)  
講師：谷真琴(まちのシューレ963物販店長)  
定員：20名(先着順)  
参加料：600円  
申込期間：8月28日(火)～、定員になり次第終了  
申込方法：電話

シンポジウム・講演会・講座の申込方法

電話、はがき、FAX、「かがわ電子自治体システム」(\*)を利用したインターネットから。はがき、FAXの場合は、氏名、電話番号、シンポジウム・講演会・講座の名称を明記してください。

ワークショップの申込方法

ワークショップ①は往復はがき(1枚につき2名まで)、かがわ電子自治体システムを利用したインターネットでお申込ください。往復はがきの場合は、ワークショップ名、氏名(ふりがな)、学年(児童・生徒の場合のみ)、住所、電話番号を明記してください。応募者多数の場合は抽選となります。抽選結果の発信・発送は締切日から1週間ほどで行う予定です。ワークショップ②は電話でお申込みください。

申込先：〒760-0030 高松市玉藻町5番5号 香川県立ミュージアム学芸課  
TEL.087-822-0247 FAX.087-822-0049

コンサート

①いろ・かたち、わくわくコンサート

主催：9月17日(月・祝) 13:30~(50分程度)  
場所：1階図書コーナー  
演奏者：みゅーじっくすぺーす・コモド  
定員：80名(立見可)  
当日参加(事前申込不要、開演30分前より受付開始)

②ミュージアム・コンサート

世界で活躍する声楽家ティローン・ランダウ氏によるピアノの弾き語りや独唱でつづる美術作品の世界をお楽しみください。

日時：12月8日(土) 14:00~15:00  
場所：1階図書コーナー  
演奏者：ティローン・ランダウ(テノール歌手・作曲家)  
中條那子(ピアノ)  
定員：80名(立見可)  
当日参加(事前申込不要、開演30分前より受付開始)



ティローン・ランダウ

カフェポット ミュゼ

秋の期間限定メニューを販売予定です。

ミュージアムショップ

特別展に関連したグッズを期間限定で販売中!  
いつものくらしに彩りを添えるグッズを多数ご用意しております。



■営業時間：9:00~17:00(9月21日(金)、11月2日(金)、11月23日(金)は19:30まで)

れきみん普及事業

要事前申込

①れきみん講座「崇徳院神霊、京都へかえる」

崇徳院神霊の京都遷遷について、その御用掛となった中瑞雲斎と直島三宅家との関わりについて紹介します。

日時：11月10日(土) 13:30~15:00  
場所：瀬戸内海歴史民俗資料館 研修室  
講師：田井静明(瀬戸内海歴史民俗資料館館長)  
定員：40名(先着順)  
申込：10月10日(水)～、定員になり次第終了

②れきみん講座

「民俗資料の活用についてー豊島民俗資料再整理活動ー」

今夏に行いました、豊島での民俗資料再整理活動をもとに、地域での民俗資料の活用と保存の重要性を考えます。

日時：12月1日(土) 13:30~15:00  
場所：瀬戸内海歴史民俗資料館 研修室  
講師：木内英博(瀬戸内海歴史民俗資料館専門職員)  
定員：40名(先着順)  
申込：11月1日(木)～、定員になり次第終了

れきみん講座の申込方法

電話、はがき、FAX、「かがわ電子自治体システム」(\*)を利用したインターネットから。はがき、FAXの場合は、氏名、電話、講座名を明記してください。  
申込先：〒761-8001 高松市亀水町1412-2 瀬戸内海歴史民俗資料館  
TEL 087-881-4707 FAX 087-881-4784

※「かがわ電子自治体システム」を利用する場合

香川県ホームページ「電子申請・施設利用申込」

香川県ホームページ「お役立ち情報」のトップ「かがわ電子自治体システム」から「電子申請・届出サービス」をクリック



香川県立ミュージアム

〒760-0030 高松市玉藻町5番5号  
TEL.087-822-0002(代表) FAX.087-822-0043  
http://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/



【分館】瀬戸内海歴史民俗資料館

〒761-8001 高松市亀水町1412-2  
TEL.087-881-4707 FAX.087-881-4784  
http://www.pref.kagawa.lg.jp/setorekishi/



【分館】香川県文化会館

〒760-0017 高松市番町1丁目10-39  
TEL.087-831-1806 FAX.087-831-1807

